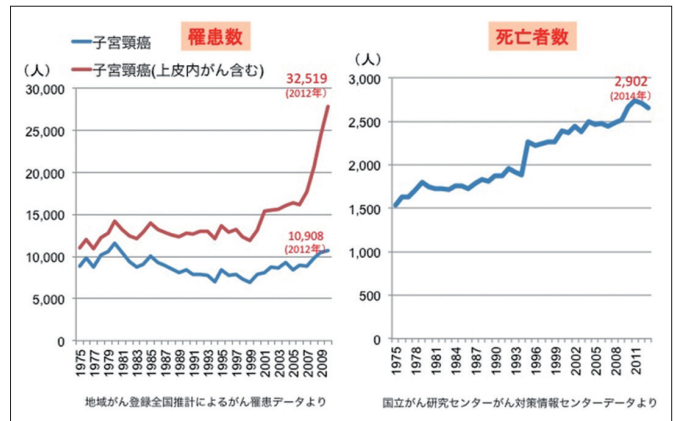


子宮頸がんとHPV (ヒトパピローマウイルス)ワクチン

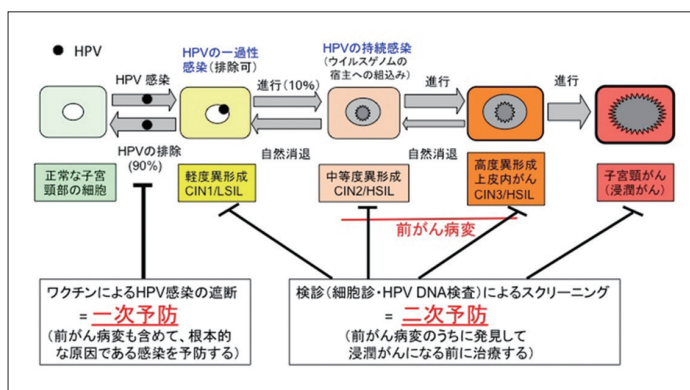
産婦人科部長

池野 慎治 ● いけの・しんじ

日本では年間約1万人が子宮頸がん罹患しており、約2900人が死亡しています。海外ではマザーキラーと呼ばれているように、日本でも20歳～40歳代前半の若い世代に増加しています。一方ほぼすべての子宮頸がんは、HPVというウイルスによる感染が原因であることが科学的に証明されています。風疹やはしか等のウイルス疾患がワクチンで予防できるように、HPVによる子宮頸がんもワクチンで予防しようという観点から2013年4月、日本政府は「初のがん予防ワクチン」としてHPVワクチンを定期接種に指定しました。



しかし、そのわずか2カ月後にはHPVワクチンの「積極的な接種勧奨の一時差し控え」を発表したのです。HPVワクチン接種後にけいれんする、歩けない、記憶力が落ちたなど神経の異常を疑わせる様々な症状を訴える人が続出したというのです。テレビのニュースではガクガクと体を激しくけいれんさせる少女の動画が繰り返して放送されました。これらの副反応とされるものの中には、「身体表現性障害」というワクチン接種に関係なく思春期の児童に起こることがある症状が含まれるのではないかという意見がありますが、その議論は割愛させていただきます。いずれにしても、メディアの報道によりHPVワクチンは怖い薬剤と感じられた方が多いはず。子宮頸がんを普段診療している医療者以外の方がHPVワクチンを怖いと感じ、娘さんの接種を躊躇されるのは当然のことと思います。私の妻（元看護師ですが）も、繰り返される報道を見て長女のワクチン接種には反対しました。結局長女本人に接種の希望があり妻を納得させて接種に至りました。長女の話では自分のまわりでHPVワクチンを接種している同級生はいないようです。



また、子宮頸がん検診をすれば早期発見早期治療でき子宮の摘出や死亡は予防できるのでワクチンは不要という方がいます。子宮頸がんは前がん病変が見つかることが多く、定期検診で死亡率は下がります。初期がんで見つければ子宮頸部の一部を切除(円錐切除)して子宮自体を温存できる可能性が高いがんといえます。しかし、円錐切除術は早産の危険を増加させる可能性がありますし、がん再発の可能性も0ではありません。がんにならない

ようにする一次予防と、早期発見早期治療を目標とする二次予防は同じがん予防でも根本的に違うのです。この二つの予防法を誤解してHPVワクチン接種によるがん予防を軽視する意見があるのは残念です。

このような経緯で、定期接種開始時には70%あったワクチン接種率が現時点では0.4%まで低下しているのが日本の現状です。WHO(世界保健機構)は日本を名指しで非難してHPVワクチンの接種勧奨を再開するよう警告しています。最近の話題としては、今年ノーベル生理学医学賞を受賞した本庶佑教授が10月に厚労省でHPVワクチン接種推奨を要望したことが一部のメディアで取り上げられました。政府からのHPVワクチン接種の積極的な推奨は一時的に中止されていますが、**現在も小6から高1の女子は定期接種として無料で接種可能です。**男性や対象外の年齢の女性も、自費にはなりますが約5万円で接種できます。希望の方は当院でも接種できますのでぜひご相談ください。

*詳細については日本産科婦人科学会ホームページの「子宮頸がんとHPVワクチン」を参照してください。